

日本はきもの博物館収蔵資料紹介

～18世紀末から19世紀初頭の靴～

日本はきもの博物館学芸員（非常勤） 市 田 京 子

はじめに

ここでは、日本はきもの博物館（広島県福山市）に所蔵されている欧米のシュー・ファッションの歴史を伝える資料を紹介させていただいており、今回はその資料441点から、18世紀末から19世紀初頭の靴を取り上げる。

18世紀、フランスのブルボン王朝をはじめとした絶対王政のもとで華やかなロココ様式が展開し、ファッションもそれを反映していた。その中で、靴も現代につながるヒールを完成させ優雅なものになった。

しかし、1790年代になると、政治は揺れ動き、ブルボン王朝の崩壊からナポレオン1世の出現へと向かい、ファッションにも大きく影響している。その変化の及んだ、この時代の靴を紹介する。

なお、掲載する写真は全て日本はきもの博物館所蔵である。

1.18世紀末期の靴

この世紀、高さ10センチにも達するヒール

が完成していたが、ハイヒールの歩くための機能性はまだ不完全で、不安定であった。それが誘因でもあろうか、ヒールは小さく低いものになっていき、甲の深い覆いやストラップは姿を消し、留め具のない「パンプス」となっている。

写真1-1は、履き口が大きくあき、爪先は小さく尖り、広い上面から三角形において小さな接地面に続く形のヒールがつく。この時期の典型といえるスタイルである。

甲材は薄いブルーに小さな黒い星型を細かくペイントした革で、足の屈曲部辺りと踵部中央で継ぎ合わせてある。裏打ちと内底は白いシルク、履き口縁取りと継ぎ目の覆いは薄いブルー・シルクのリボンテープ、やはり薄いブルーのシルク糸の房飾りが幅1.2cm程のバックル状金具で留めてある。ヒールはやはり薄いブルーの革で巻かれる。シャンクやカウンターにあたる補強はみられない。

1790年頃、イギリス。全長23.5×幅6.4×全高8.0cm、ヒール高3.9cm。



写真1-1



写真2-1

写真2-1も革製で、鮮やかなパープルだったものが、退色しやすい色のため、かなり褪せている。爪先部にはカットワークの装飾が施され、カット部にはアイボリーの革がのぞかせてある。この装飾も新しい要素で、博物館には他に1例ある。



写真1-2

甲の裏打ちは白い革と布で、爪先部に布地をはるのが一般的になっている。内底には白布がはられている。ヒールはアイボリーの革で、外底の革には本誌158号写真10のような加工がされている（写真2-2）。この加工は写真1（1-2）・4などかなりの例がみられる。



写真2-2

1795年頃、イギリス。全長25.2×幅6.5×全高9.0cm、ヒール高5.0cm。



写真3

写真3は、鮮やかな黄色に染めた革の靴で、この時期には様々な色の革が用いられるようになってくる。やはり黄色シルクの縁取り、房飾りがみられ、房の中央は真鍮製のボタンで留められている。

1792年頃。全長24.5×幅7.0×全高8.4cm、ヒール高3.8cm。



写真4

写真4は、同じタイプのブラック・コットンの靴で、ヒールはブラック・レザーである。甲の裏打ちは白のシルク地で、内底には白い革がはってある。踵部内側に暗青色の革が縫い付けてあり、補強かと思われる。ブラック・シルクの縁取りとリボン飾りがあり、縁取りには細い紐糸を通して前中央で結ぶようになっている。これは足に合わせて締めたものか補強かは不明であるが、この後多くみられるようになる。

1790年頃。全長24.7×幅6.8×全高9.0cm、ヒール高4.3cm。

の形に独自性をもつものも出て、バラエティを感じさせるようになり、現代性も感じさせている。

80年代までの靴はそれぞれに織り柄や刺繍に独自性があるにもかかわらず、どこか画一的であったが、この時期、カラフルな革素材が増え、素材の組み合わせやヒール

写真5は前部に革、後部に布地を用いたものである。革はきれいなピンク色で、茶色コットンをのぞかせた細かいカットワークと、退色してベージュを呈するピンク・シルクのロゼッタ飾りがある。後部はコットン地で、変色のため暗いベージュを呈している。縁取りはシルクであり、裏打ちも白シルクと白革、内底も白シルクである。カー



写真5



写真6



写真7



写真8

ブのない大きめのロー・ヒールはピンクの革巻きである。

1795年頃、イギリス。全長25.5×幅6.5×全高7.0cm、ヒール高2.6cm。

写真6はオレンジにブラウンやベージュの縞を織りだしたシルクで、シルク・リボンを折りたたんだ飾りがつく。履き口の縁

取りは傷み、腰がなくなっている。芯のないシルク素材では支えきれなかったことを思わせる傷みである。ヒールは、80年代のタイプで、白い革が巻かれている。

1790年頃、イギリス。全長22.1×幅5.3×全高9.1cm、ヒール高4.9cm。

写真7は杉綾のような地模様を織りだしたアイボリーシルクに、スパンゲルと金糸で刺繍模様を施したものである。かっちりとした作りで芯材の使用を想定させる。直立する踵部には継ぎ目はなく、裏打ち・内底とも革が用いられる。ヒールのないフラットなスタイルは新しい要素である。

1800年頃、フランス。全長24.1×幅6.5×全高6.2cm。

同じタイプの写真8は保存状態不良で、甲の灰緑色のシルク・タフタが剥離している。そのため、裏打ちの白い革に薄いシルクを重ねただけの作りや、爪先部裏打ちの白い布と後半部の革との合わせ目などが確認できる。細かい縫い目も全て手縫いであり、スタイルの変化はあっても、靴の左右の別はまだ明確ではない。

2. 19世紀初頭の靴

ナポレオン1世が帝位につく1804年頃の靴にはヒールがみられない。ファッションが古代ギリシャ風のシンプルさを求め、靴もそのサンダルをイメージしたといわれる。写真7・8からもヒールは消えているが、爪先尖りの形を残し、装飾的なロココの名残りもある。その爪先が丸みをもち、刺繍などの装飾のないものになっていく。

写真9-1はアイボリーのシルク・サテン製である。基本的な作りは変わらないが、深めに覆った甲に小さなりボン飾りがつき、サンダルのように足首に巻く長いリボンテープがつくのが特徴となっている。

この靴の底革には僅かに左右の違いがあ



写真9-1

り (写真9-2)、右用の内底には紙製のラベルがある (写真9-3)。読み難いのだが、DUIGAN BOOT MAKERとあり、イギリス及びヨーロッパ王室の御用達であったことが分かる。また、左右ともに手書きのサインがあり「16 Nov. 1823」という日付が残る。

1823年頃、イギリス。全長23.5×幅6.7×全高5.8cm。足首に巻きリボンの幅は1.2cmで長さは約37cmである。

写真10-1は黒いシルク地にピンクのテープでストライプ模様を施したもので、やはりピンクの縁取り、リボン飾り、長いリボンテープがつく。裏打ちは前部が白リネン、後部が白シルクで、内底にも白いシルクがはられている。底革にはやはり僅かな左右の別があり (写真10-2)、内側に左右をマークするような濃い茶色が入れてある。

ラベル：BORSLEY maker Wigmoze Street Cavendish Square (写真10-3)。

1820年頃、イギリス。全長23.6×幅6.9×全高5.5cm。

おわりに

豪華で優雅な靴から、「ベビー・ルイ」とも呼ばれたロー・ヒールのシンプルなスタイルに変わり、シュー・ファッションを象徴するようなヒールが姿を消していく時期の靴を紹介した。この変化は、歩くための機能性を求めることから生じたのかもしれない。現代に通じるようなデザインがみ



写真10-1



写真9-2



写真10-2



写真9-3



写真10-3

られるのも興味深い気がする。ラベルの付く靴が増えるのも、その潮流からくるように思われる。

次回は19世紀前半の靴を紹介する。

～18世紀末から19世紀初頭の靴～ —日本はきもの博物館所蔵—

1795年頃の靴。

イギリス。黒褐色レザーにピンクのシルクテープの縁取り。爪先部には、植物をモチーフにしたカットワークとステッチ模様。カットワークとヒールはピンクのレザー。全長25.8×幅7.1×全高8.5cm、ヒール高4.4cm。



1800年頃の靴。

イギリス。ダークブラウンの紋織りシルクに、ピンクのリボン刺繍とステッチを施す。ヒールはピンクの革巻き。ラベル：PARRY Shoe Maker Little Argyll Street。全長21.5×幅5.8×全高9.1cm、ヒール高3.5cm。

1810年頃の靴。

黒小山羊革製。甲のカットと長いフラッグでサンダルイメージを表す。中央に黄色シルクのロゼッタを並べ、シルクの房飾り。フラッグから踵の小穴に通す長いリボンテープを足首に巻く。全長24.1×幅6.3×全高7.2cm。

